
公益財団法人 日本セーリング連盟

中長期戦略

2022年2月26日



はじめに

1. 戦略策定の背景

幅広い普及・マーケティング活動を推進する必要

これまで

国内統括団体として競技普及・強化

課題

- ・スポーツ関連予算の縮小
- ・団体活動のより一層の発展のためのビジョン策定

■ JSAF

- ・会員増強プロジェクト
- ・財政健全化プロジェクト

■ スポーツ庁

「中央競技団体による中長期普及・マーケティング戦略策定・実行に向けた手引き」策定

将来

社会への価値創造を通じた普及ならびに企業・自治体等のステークホルダーからの資金調達などの収益力向上が必須

2. 戦略の目的

JSAF
ビジョン

セーリングをもっと楽しく

Maximize fun of sailing



もっと身近になる
Easy Access



関わり続ける
Open Community



もっと強くなる
High Performance

収益力向上に
不可欠な
普及・マーケ
ティングを含
めた重点戦略

公益財団法人として、競技者に留まらない
社会におけるセーリングスポーツの意義を発信

多様な人材・資金などの資源を活用しながら
団体の活動を持続的に

競技の国際的地位の向上のための強化等を推進

Ⅰ 中長期重点戦略の概要

1. セーリングの提供価値・体験

ターゲット		提供価値・体験
するひと	愛好家	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然を体験することができる ・ 海洋・沿岸環境を理解し、環境保全に貢献できる ・ 水辺の危機管理・チームマネジメントを会得できる ・ ファミリー、友人、コミュニティとの交流を楽しめる ・ レースやクルージングに加え、他の水上アクティビティ、ハーバーで過ごす時間など、多様な仕方で余暇を楽しめる ・ 生涯を通じて、年齢に応じた関わり方で、楽しみ続けることができる
	競技者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体格差に応じて艇種を選んで楽しめる ・ 障がい者と健常者、老若男女のインクルーシブな競技で平等な価値観を醸成できる ・ 多様な、変化する競技環境の中で、予測やリスクマネジメント、対応に関する思考方法を身に付けられる ・ 競技中に外部の援助が得られないため、「自ら考え、自ら行動する」力がつく
みるひと	ファン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 景観として写真映えする (フォトジェニック) ・ 一緒に映り込める (インスタ映え) ・ 観戦やイベントを楽しむことができる ・ SDGsなど、セーリングの社会的価値に、コミットメントできる(海洋環境保全、海洋教育やジェンダー平等)
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 特定の選手の応援を楽しむことができる
さえるひと	スポンサー企業	<ul style="list-style-type: none"> ・ SDGsへの取組と連動しやすい。 ・ 実施者の高額所得者比率の高さ、幅広さ(ジュニアからシニア、ファミリーまで)が、ビジネスチャンスにつながる ・ 自治体との結びつきが強く、ビジネスチャンスにつながる ・ スポンサー企業同士の交流機会が得られる
	オフィシャルズ コーチ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 若い選手の育成やレースに関われる ・ セーリングに関わりながら自らのスキルを磨ける ・ 選手と対峙し、お互いの成長を感じられる ・ SDGsなど、セーリングの社会的価値に、コミットメントできる
	自治体	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大会が複数日おこなわれるため、スポーツツーリズムなどによる地域活性化につながる ・ セーリングを特色とした観光客招致や、地域コミュニティの活性化につながる ・ SDGsへの取組と連動しやすい。 ・ 水辺の安全や海洋環境保全などの自然教育の実現につながる

2. ビジョンと提供価値の関係

	する	みる	ささえる	目標
もっと身近になる	<p>自然体験</p> <p>インスタ映え</p> <p>ファミリー交流</p>	<p>選手応援</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ Start Sailing拡大 (経験者や友人に誘われて、子供体験を家族一緒に) ・ 疑似体験機会の創出 ・ インクルーシブセーリングの普及 ・ 記念撮影、およびお気に入り選手写真のSNSアップ数拡大
関わり続ける	<p>地域振興 / 社会貢献</p>			<ul style="list-style-type: none"> ・ ファミリーイベントの拡大 ・ セーラー(含むファン、オフィシャル)継続期間の伸長 ・ 海洋環境保全への取組 ・ コミュニティの維持拡大
もっと強くなる		<p>選手応援</p> <p>スポーツ観戦</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ 観戦体験機会の創出 ・ 国内レースの質向上 ・ 見て楽しいレース(ツール/フォーマット)の開発

II 3つの柱の重点戦略

1 もっと身近になる Easy Access

1. ビジョン



もっと身近になる Easy Access

セーリングを知る機会が増える
→一般の認知・関心の向上

より多くの人々がセーリングに接点を持つ
→気軽に始められるモデルづくり

より多くの人々が自分も競技を始めようと思う
→ファン拡大を通じたJSAF会員数増加

より多くの人々が、セーリングに接する機会を増やし、身近に感じられる

背景・意図

セーリングを知り、興味を持つ機会は極めて少ない。仮に知っていても、体験する機会は限られ、その魅力を感じることは簡単ではない。セーリング経験のある親でさえ、遠く・高く・面倒だと感じて、子供に経験させることは少ない。興味を持った人がいても、体験や意欲を高める機会を用意できていない。

課題・方向性

1. 一般の認知・関心の向上

- ✓ 一般への広報・PRに力を入れ、広報の強化とWebを活用して競技の魅力を伝え続ける
- ✓ 大会やイベントの盛り上げ、スター選手の輩出などを通してメディアに取り上げられやすくする

2. 気軽に始められるモデルづくり

- ✓ 興味を持ったなら近く・安く・簡単に試乗できる、家族で一緒に体験できるなど、さまざまなニーズに応じてセーリングを始められる環境（人・道具・場所）をつくる

3. ファン拡大を通じたJSAF会員数増加

- ✓ 継続的なコミュニケーションによって、継続的にファンを獲得する
- ✓ ファン自身が競技を始められるような機会を作り、結果として会員数増加を目指す

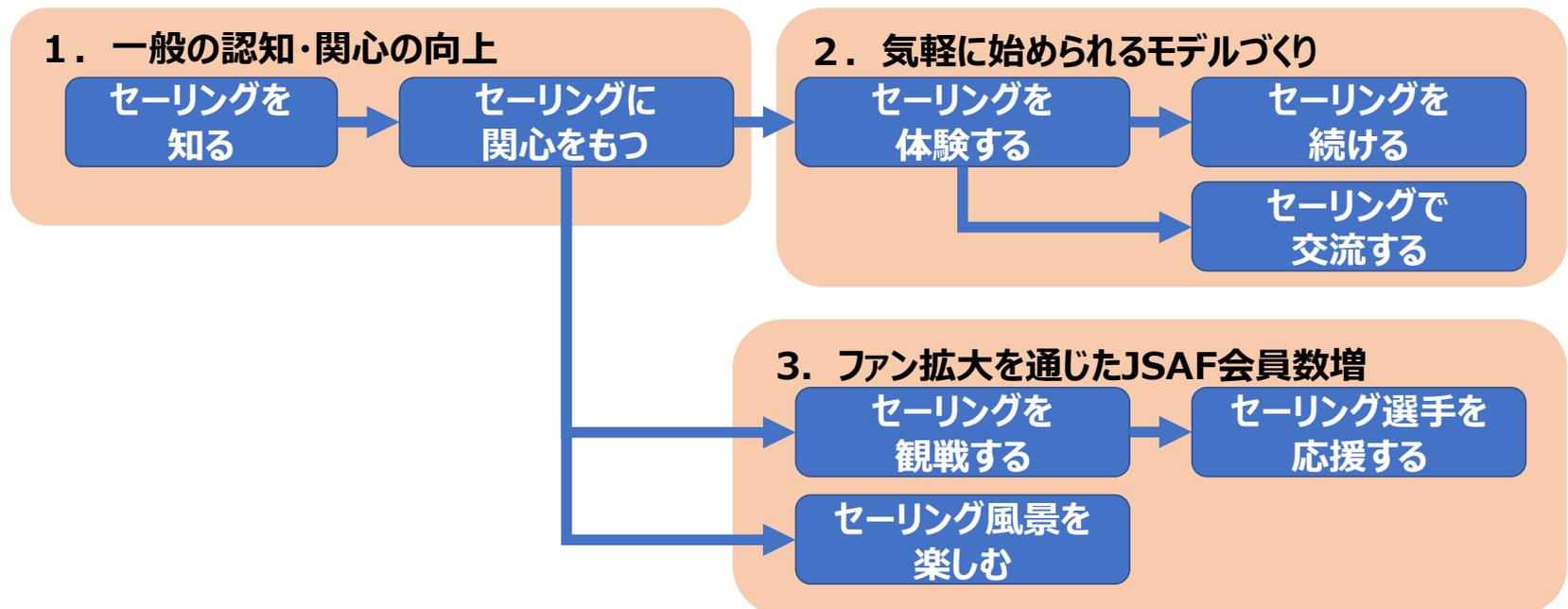
2. 現状・課題・中期目標

現状

- ① 新規会員登録者数の減少
- ② 認知・関心を持つファン層の未創出

課題

- ① 認知・関心を高めるターゲットを絞った戦略的広報ができていない
- ② 気軽に始めて続けるための情報・環境が提供されていない
- ③ ファン層の創出



3. 施策の全体像

中長期戦略	施策	連携・協働先
①一般の認知・関心の向上	<u>1) 積極的なPR戦略の実施</u>	<u>広報</u>
②気軽に始められるモデルづくり	<u>1) 初心者体験会Start Sailing【重点】</u> 2) 既存プラットフォームにおける体験情報提供 3) 加盟団体のセーリング体験会マッピング 4) 先進団体の専門家のコンサルティング・招聘	<u>普及指導</u> 広報・レース
③ファン拡大を通じたJSAF会員数増加	1) SNSを活用したファンコミュニティの構築 <u>2) リアルでわかりやすい観戦体験の提供【重点】</u> 3) ラグジュアリー層の観戦船	広報 <u>広報・レース</u> 事業開発・レース

II 3つの柱の重点戦略

2 関わり続ける Open Community

1. ビジョン



関わり続ける Open Community

誰もが気軽に参加できるコミュニティがある
→より健全なセーリング文化の醸成

セーリングを楽しむ続けるために海洋環境を守る
→海洋教育やマリンスポーツと連携した社会貢献

より多くの人々がセーリングを続けやすい環境がある
→普及や強化を担う所属団体の支援

多様な人々が関わり、生涯を通じてセーリングを楽しみ続けられる

背景・意図

既存のコミュニティと文化に起因して、セーリングと距離を置くことを選択する人が一定数いる（多様性への不寛容やハラスメント感覚欠如など）。多くの団体において組織の運営・維持は大きな負担となっている。生涯スポーツとしてセーリングを楽しみ、活動を継続することを、支援・指導する人材が全国的に不足している。他のマリンスポーツや地域社会などの連携を通じた自然体験や海洋教育の可能性を活かしきれていない。

課題・方向性

1. より健全な文化づくり

- ✓ スポーツマンシップと多様な価値観を重んじる文化をつくる（ハラスメント等を排除する）
- ✓ セーラーが、家族や友人・知人を誘いたくなるコミュニティをつくる

2. 海洋教育やマリンスポーツと連携した社会貢献

- ✓ 海洋環境保全やシーマンシップ教育などにより、持続可能な社会の実現に貢献する
- ✓ マリンスポーツや地域社会などとの連携を通して、多くの人々が学び、楽しめる機会をつくる

3. 普及や強化を担う所属団体の支援

- ✓ 組織運営や事務手続きの効率を高めて、各団体がセーラーの普及と強化に専念しやすくする
- ✓ 社会の変化に応じて、より透明性の高い組織運営と効果的な役割分担を行う

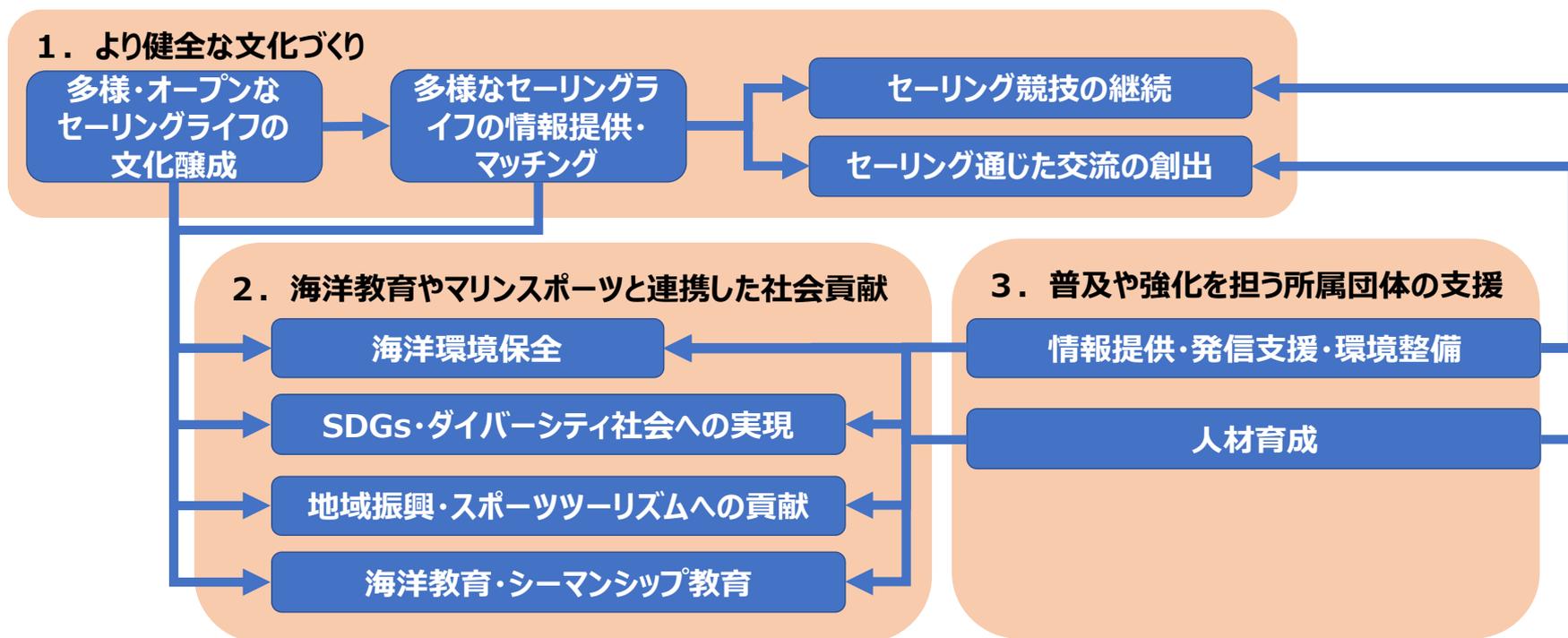
2. 現状・課題・中期目標

現状

- ① セーリングライフの継続の難しさ
- ② セーリング環境の活用可能性

課題

- ① 多様なセーリングライフの提供
- ② セーリングを通じた社会貢献の機会の不足



3. 施策の全体像

中長期戦略	施策	連携・協働先
①より健全な文化づくり	1) 既存セーラーが継続しやすいイベント実施 2) セーラーのマッチング・レンタル艇配備 3) eSailingを通じたセーリングの普及・強化	レース、加盟 普及、外洋 eSailing
②海洋教育やマリンスポーツと連携した社会貢献【重点】	<u>1) パラスポーツを通じたインクルーシブイベント</u> <u>2) 海洋プラスチック調査プロジェクト</u> <u>3) セーリングを通じた海洋教育・安全教育</u> <u>4) 強化拠点のマリーナを通じた地域振興</u>	<u>障がい者</u> <u>環境</u> <u>普及、外洋</u> <u>普及、外洋</u>
③普及や強化を担う所属団体の支援	1) 加盟団体等の社会貢献の取組の可視化	普及

II 3つの柱の重点戦略

3 もっと強くなる High Performance

1. ビジョン



もっと強くなる High Performance

選手の可能性を引き出す育成システムがある
→ジュニア世代からの連続性のある強化

より多くの選手が世界最高の舞台上で活躍する
→世界トップレベルの選手を輩出し続ける

より多くの人々が選手を応援し、喜びを共有する
→選手を知り、応援したくなる環境づくり

より多くの人々が、トップ選手を応援・支援し、喜びを分かち合える

背景・意図

世界トップレベルの選手の輩出は、普及・強化・メディア価値の視点から不可欠である。今後は予算と人材に限られるなかで、才能ある選手の発掘と連続性をもった強化がより重要となる。また、ジュニア・高校・大学などのステージを超えて、意志のある若い選手が、キールボートを含んだ競技を続けられる支援も必要となる。

テクノロジーの進化により、競技の理解のしやすさが飛躍的に高まり、「観る」「支える」といった関わり方、楽しみ方が生まれる可能性がある。トップ選手の社会的な貢献もこれまで以上に重要となる。

課題・方向性

1. ジュニア世代からの連続性のある強化

- ✓ キールボートを含むステップアップの道筋を明らかにし、一貫した競技力向上プログラムを定める
- ✓ ジュニア・ユース世代の指導者の発掘・育成と保護者を含む選手支援プログラムを定める

2. 世界トップレベルの選手の輩出（オリンピックのメダル獲得+キールボート最高峰レース参戦）

- ✓ 選手間の相互学習、より高度なIT/データ/科学的知見の活用など、より組織的な強化を実現する
- ✓ 広報・マーケティングによりスポンサーを獲得し、強化資金を戦略的に配分する

3. 選手を知り、応援したくなる環境づくり

- ✓ ファンがトップ選手を応援し、交流できる大会・イベントの企画と運営を実現する
- ✓ セーリングの発展に向けたトップ選手・指導者の役割を定め、必要な教育と支援を行う

2. 現状・課題・中期目標

現状

① 競技面での選手育成が中心

課題

① 社会変革リーダーとしてのアスリートの養成

1. ジュニア世代からの連続性のある強化

横断的な選手育成プログラムの構築

セーリング競技の多様なパスウェイ・交流機会の整備

2. 世界トップレベルの選手の輩出

変革リーダーとしてのアスリート教育

3. 選手を知り、応援したくなる環境づくり

よりわかりやすい観戦体験の提供

顔の見える情報発信の支援・応援の仕組みづくり

3. 施策の全体像

中長期戦略	施策	連携・協働先
①ジュニア世代からの連続性のある強化	1) 既存セーラーが継続しやすいイベント実施 2) セーラーのマッチング・レンタル艇配備 3) eSailingを通じたセーリングの普及・強化	レース、加盟 普及、外洋 eSailing
②世界トップレベルの選手の輩出	<u>1) アスリートの情報発信・交流に関する研修・教育及び環境整備</u> <u>2) アスリートのセカンドキャリア形成支援</u>	<u>アスリート、</u> <u>広報、オリ強</u> <u>アスリート</u> <u>オリ強</u>
③選手を知り、応援したくなる環境づくり	<u>1) アスリートプロモーションの実施</u>	<u>アスリート、</u> <u>広報、オリ強</u>



公益財団法人 日本セーリング連盟

中長期戦略

(選手強化編)



1. 東京大会からの課題整理

事象

1. コロナ禍によりトップ選手との競争環境が消失。
確認→自信プロセス取れず、積極性不足を誘発。
2. 選手とコーチ間で課題認識にズレ（特にスタート）。
3. 結果的にクローズドな体制になってしまい、
状況把握含め、組織としてのバックアップできず。
4. コロナ禍による選手メンタル低下阻止できず。

課題

1. 多くの競争環境（トップ選手との）の確保。
2. 差異（課題）の見える化。
 - 定量化、映像化等（詳細は今後明確化）
3. 埋めるためのHOW TOの提供体制構築。
 - 伝える技術を持ったコーチング
 - 1人のコーチに依存しないチーム・コーチングの確立
4. 逆境に動じないメンタルの育成。

2. その他の課題

事象

1. 五輪代表候補選手が継続的に輩出されにくい
2. 五輪初出場年齢高く、出場経験生かさず引退多
 - 大学卒から本格強化という主な流れ
 - 2回目出場は体力/キャリア面から躊躇
3. コーチ育成・循環のしくみがなく、場面都度の補完

課題

- 学校部活で燃え尽きずに強化希望選手を待つしくみ
- 学校部活に依存しない育成体制の構築
- 選手育成と並行し、コーチ育成のしくみも構築

3. 取組方針

■ 強くなるために

- ・ JPNの力を結集させる（結束）
- ・ 属人的活動から組織/しくみとしての活動を意識する

■ 普及につなげるために

- ・ 各クラスの活動のみでなく「セーリング」としての活動を意識する

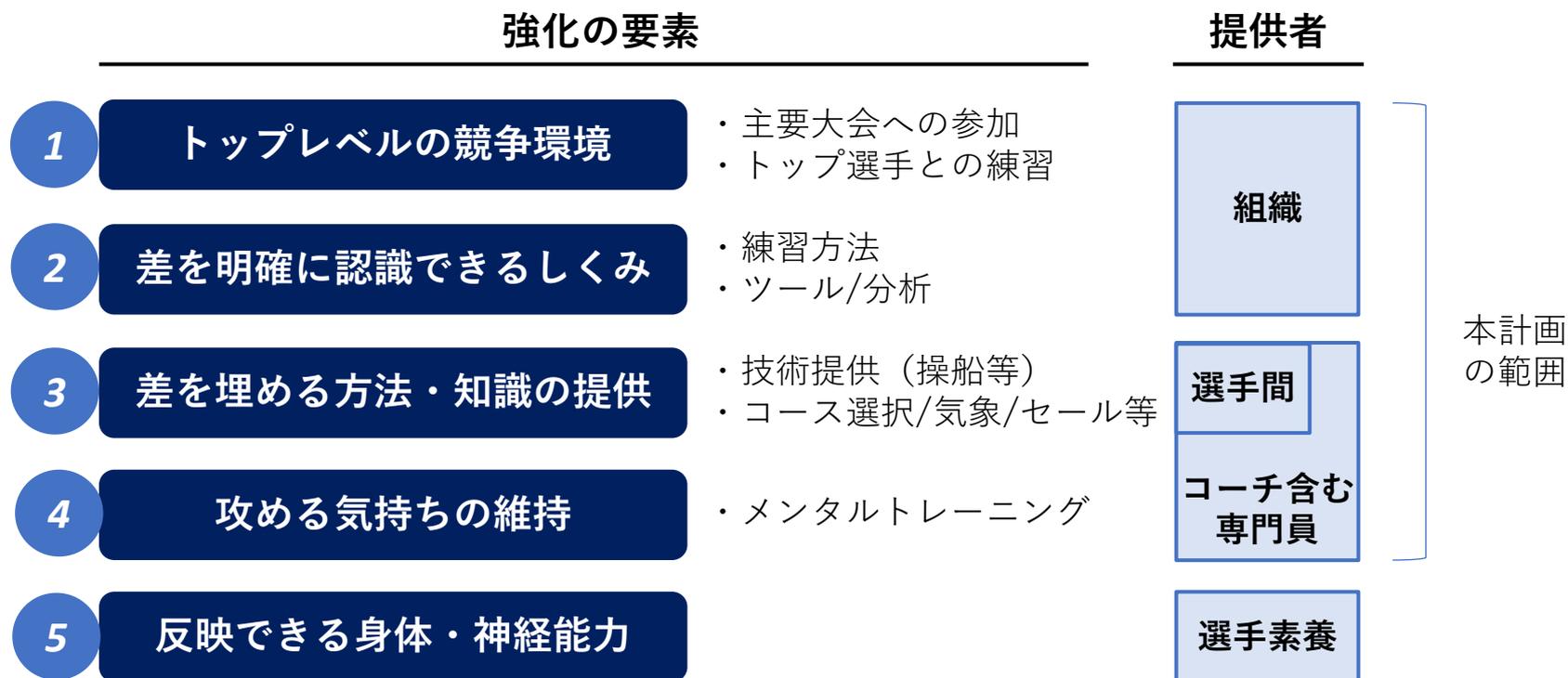
■ 継続するために

- ・ シニア層へのシームレスな移行を伴う、次世代選手育成システムを整備する

これらの方針を練り込んだ施策を構築し、実行する。

※この実行施策は、今後「JAPAN流 強化システム」として、日本の強みを生かした、他国が真似できない、オリンピックにて常に上位を狙える選手を輩出し続けるしくみとして機能することを企図している。

4. 実行施策の要素整理① – 強化の要素と提供者



5. 実行施策の要素整理② – 強みと弱み

- JPN/強豪他国の強み・弱みを、クロスSWOTの形で示す。ただし、本チャートは普及期、育成期、強化期という3つのPhaseが混在しているため、各Phaseに分解し、実行策に結び付ける。

	JPNの強み	JPNの弱み
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 丁寧/真面目な国民性 ・ 個々には高平均も突出少ない ・ 個よりも集団/組織力 ・ 世界的なセールメーカーの存在 ・ 情報収集と高い解析能力 ・ 企業によるバックアップ (JPN特異現象) ・ 多様な練習環境 (気温、海面) ・ 学校という育成母体の存在 ・ コーチ資格制度の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 少資金 (スポンサー少) 選手層が薄い (競技人口) ・ 欧州勢との練習時間少 (遠い) ・ 情報活用 (結果抽出と選手反映) 不得手 ・ 育成/強化システムなく個の対応 ・ 短期計画と実行に終始 ・ コーチ育成システムなし ・ 学校での指導レベル不揃い ・ 知識の連携薄い
強豪国の強み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道筋、目標が見える強化システム/設計の存在 ・ 分かり易い/導いてくれるコーチの存在 ・ 高い最新情報の入手性 ・ 高い文化的土壌 ・ 潤沢な資金 ・ 多数の艇が集まる練習・競争環境 (欧州) 	<p>【差別化】</p> <ul style="list-style-type: none"> - 諸外国でもマネできるが、それ以上に取り組むことで、JPNの色となること <ol style="list-style-type: none"> 1. 解析技術の発展・活用 2. クラスを超えた集団/組織力の拡大
強豪国の弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 強みに一部行き過ぎ感あり (弊害) <ul style="list-style-type: none"> - 明確なトライアングルから外れたら終わり - 確立された仕組で自由度制限の可能性 ・ 強化選手になるまでの資金少 	<p>【積極化】</p> <ul style="list-style-type: none"> - 諸外国ではマネできないこと <ol style="list-style-type: none"> 3.セールメーカーとのタイアップ強化 4.育成母体 (学校・c協会) の底上げ 5.企業バックアップの積極化 6.活動すべてに緻密さの追求
		<p>【防衛/キャッチアップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> - 諸外国に勝つためのベースの整備 <ol style="list-style-type: none"> 7. 選手育成/強化システム構築 8. コーチ育成システム構築 9. マーケティング要素の採り入れ 10. PDCAサイクルの徹底 11. 遠隔での情報入手と指導方法の確立 12. メンタル等の専門性との連携 13. 欧州滞在長期化 (シェンゲン回避)

5. 実行施策の要素整理② – 強みと弱み（普及期）

普及期：地域タレントとしての育成～ナショナルタレントへの引き上げ

		強み	弱み
		<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧/真面目な国民性 ・高平均な個々と集団/組織力 ・学校という育成母体がある ・コーチ資格制度がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・競技人口が少ない ・育成/強化システムなく個の対応 ・学校での指導レベル不揃い、連携薄い
強豪国の強み	<ul style="list-style-type: none"> ・道筋、目標が見える強化システムがある ・分かり易い/導いてくれるコーチがいる ・高い文化的土壌 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学校・地域での育成底上げ <ul style="list-style-type: none"> ・指導内容統一化 ・連携強化（共有機会の設定） 2. ステップアップの道筋明確化と浸透 <ul style="list-style-type: none"> ・ステップアップの入り口と環境紹介 3. コーチ育成 <ul style="list-style-type: none"> ・公認コーチ資格の内容にひと味追加 	
強豪国の弱み	このステージでは特筆事項なし		

5. 実行施策の要素整理② – 強みと弱み（育成期）

育成期：ナショナルタレントとなったユース（ユース強化、HOPE育成選手）

		強み	弱み
		<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧/真面目な国民性 ・高平均な個々と集団/組織力 ・情報収集と高い解析能力 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報活用（結果抽出と選手反映）不得手 ・育成/強化システムなく個の対応
強豪国の強み	<ul style="list-style-type: none"> ・道筋、目標が見える強化システムがある ・分かり易い/導いてくれるコーチがいる 	<p>1. 効果的な育成システム構築（この完成度が重要なキーとなる）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ YWメダル獲得を目標とした、しっかりした土台を作ること、が目指すこと <p>【要素（概略）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 技術（スピード、コース、スタート等） ・ メンタル ・ フィジカル（ストレングス、コンディション、栄養） ・ 気象、ルール、インテグリティ等の知識 ・ データを見慣れ、自身で活用できる <p>【方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ HOPE育成Pの枠組 ・ シニア選手との合同練習ほか（遠隔指導の手法を取り入れられないか） 	
強豪国の弱み	このステージでは特筆事項なし	<p>2. コーチ育成</p>	

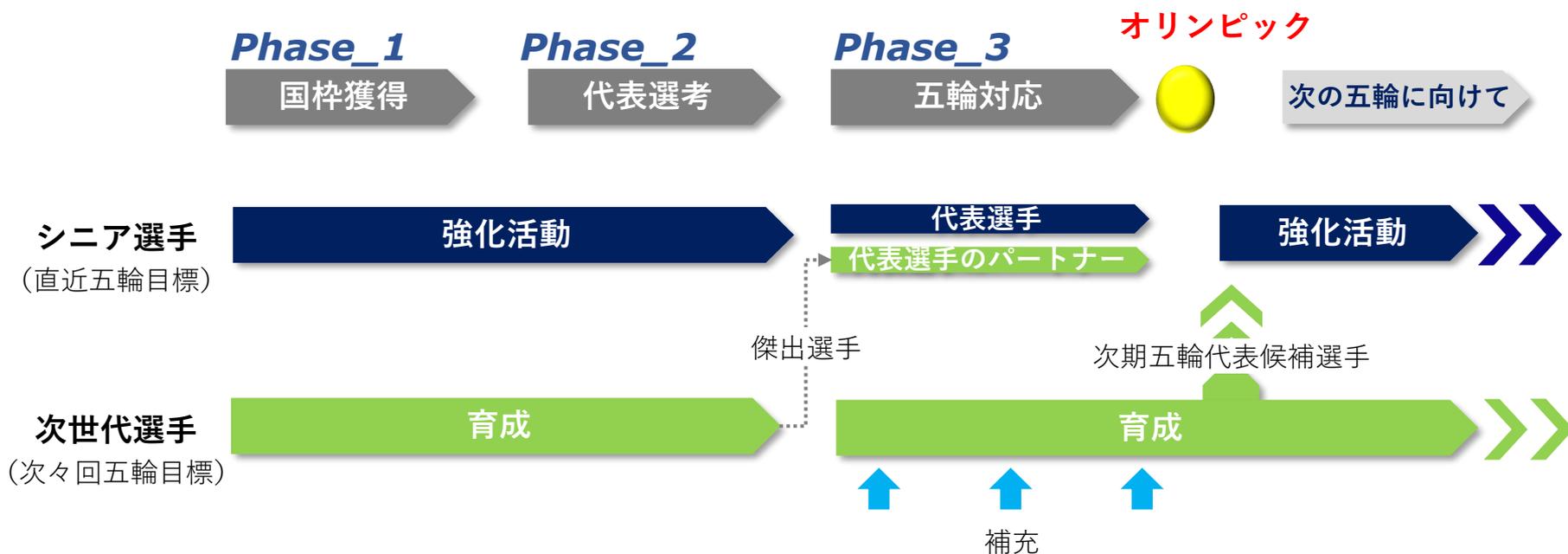
5. 実行施策の要素整理② – 強みと弱み（強化期）

強化期：NT、HOPE、シニア強化～オリンピック代表

	強み	弱み
	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧/真面目な国民性 ・世界的なセールメーカーがある ・情報収集と高い解析能力 ・企業支援（社員チーム） ・多様な練習環境（気温、海面） 	<ul style="list-style-type: none"> ・少資金（スポンサー少） ・情報活用（結果抽出と選手反映）不得手 ・育成/強化システムなく個の対応 ・短期計画と実行に終始 ・コーチ育成・連携システムなし
強豪国の強み	<ul style="list-style-type: none"> ・道筋、目標が見える強化システムがある ・分かり易い/導いてくれるコーチがいる ・最新情報の入手性 ・潤沢な資金 ・多数が集まる練習・競争環境（欧州） 	<p>【積極化】 諸外国でもマネできるが、それ以上に取り組むことで、差別化にもなること</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 解析技術の積極活用 <ul style="list-style-type: none"> ・ HPSC/大学等の管学機関 ・ ノースセールなどの民間企業 2. クラスを超えた集団/組織力向上
強豪国の弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・強みに一部行き過ぎ感あり（弊害） <ul style="list-style-type: none"> - 明確なトライアングルから外れたら終わり - しくみに縛られ自由度制限の可能性 ・強化選手以前の活動資金少 	<p>【差別化】 諸外国にはマネできないため、差別性を際立たせること</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. セールメーカーとのタイアップ強化 4. チーム保有企業拡大 <ul style="list-style-type: none"> ・ マーケティング連携 5. 活動すべてに緻密さと見える化（気持ちの持ち方として） <p>【同質化】 ベースを整備し、強豪国と同レベルにすること</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 選手強化システム構築 <ol style="list-style-type: none"> 6.1 技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題と進捗の見える化 ・ 差異と目標が見える練習方法の確立 ・ トップレベル競争環境の長期確保 6.2 メンタル耐性 6.3 フィジカル/コンディショニング 6.4 ルール・気象等の知識 7. マーケティング要素組み込み 8. 本番でのパフォーマンス最大化 <ul style="list-style-type: none"> ・ ピーキングマネジメント（フィジカル/メンタル） ・ チームビルディング等 9. コーチ育成システム構築 10. 本番環境の十分な調査とFB

5. 実行施策の要素整理③ – 強化の五輪サイクル

- 五輪出場までの強化は、「国枠確保」「代表選考」「五輪対応」という3つのPhaseに分けられる。
- 特にPhase3（五輪対応）は、他国との差別性が発揮され、五輪での結果を左右する重要なPhaseと認識すべき。
- 五輪候補の継続輩出のために、直近の五輪目標選手強化と並行し、次世代選手の育成を実施する必要がある。
- 次世代の育成は、Phase3にて五輪代表選手のパートナーを務めることができるよう、スケジュールされた取組を実施すべき。

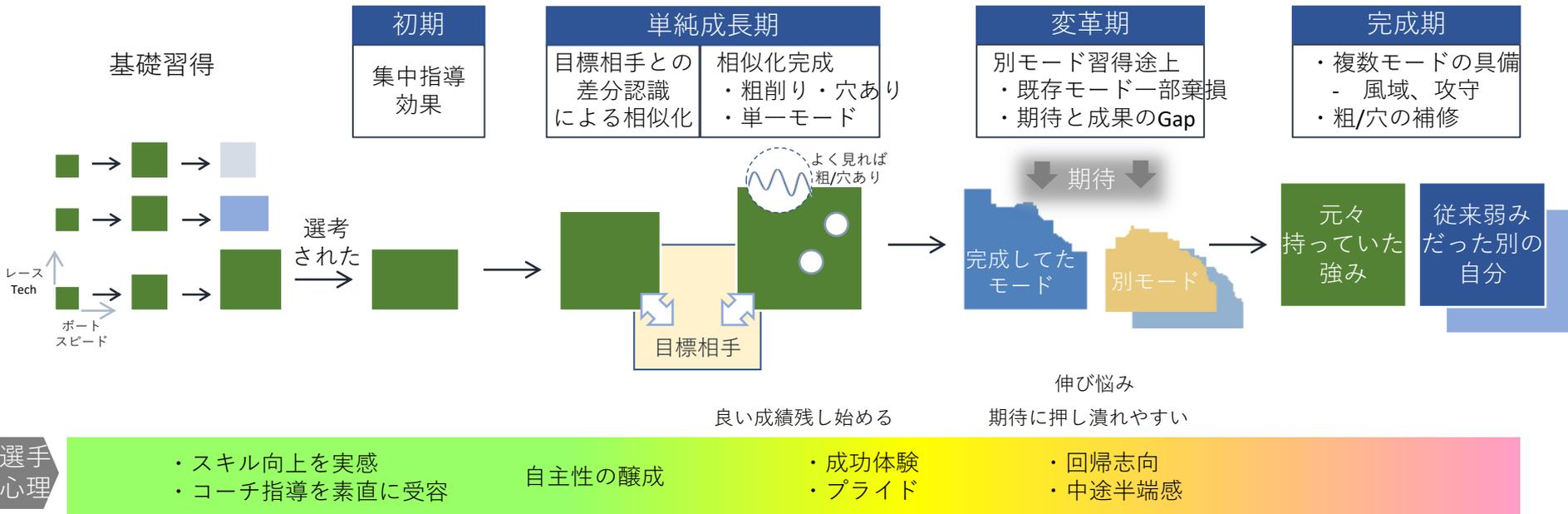


5. 実行施策の要素整理④ - 選手の強化モデル (案)

- 本図はまだ案であるが、こうしたモデルを作成することで、選手とコーチが共に、現在の位置と今後の課題・起こり得るリスクを事前に把握・共有しておくことができる。

育成期

強化期

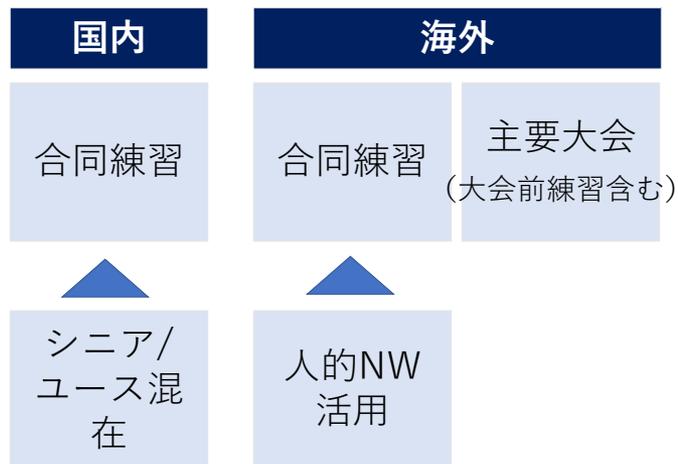


6. 実行施策①

- トップレベルの競争環境確保/差を明確に認識できるしくみ化

トップレベルの競争環境確保

- 国内：できるだけ多くの艇種の中での環境確保する。
- (他クラス選手の取組を見るなど、技術面よりもメンタル面の強化に期待)
- 海外：強豪国との合同練習機会の創出と継続を実施する。



ただし、欧州勢の「常時」合同練習環境に比して時間的には不十分。少ない時間を補う方法が必要

差を明確に認識できるしくみ化 (最重要課題)

JPN独自の差分把握のしくみを、2024年までに構築する。

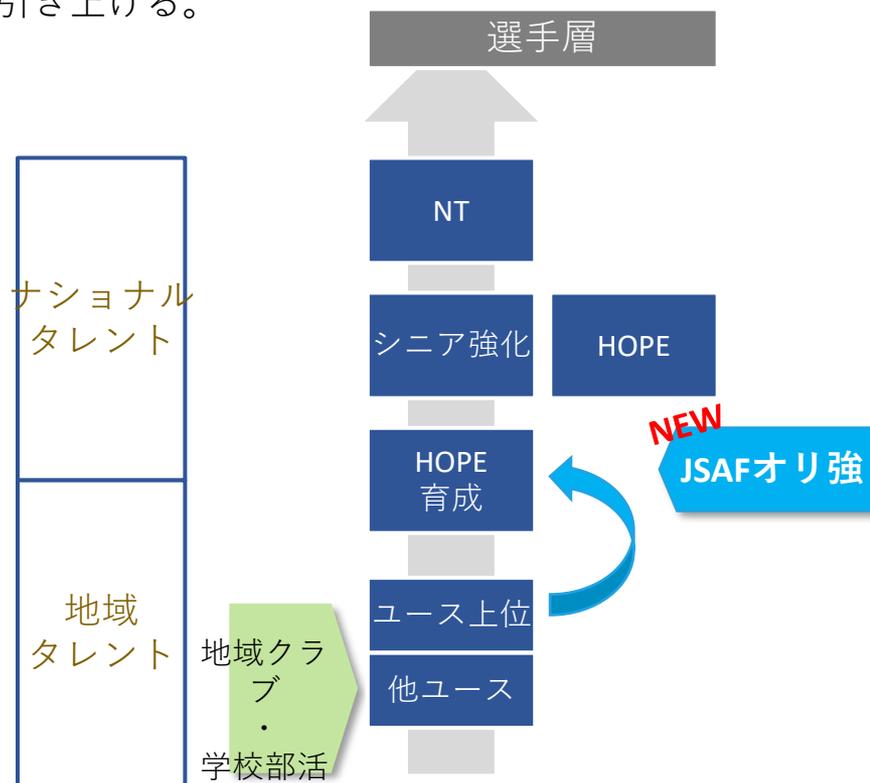
- 差分をできるだけ定量的な記録（データ）とすることで、多くの識者が検討できる環境としたうえで、HPSC等との協力体制を構築していく

e.g. 映像（キネティクスとボートスピード、角度の関係等）

e.g. センサによる、ハル姿勢、マストシェイプ、セール面の流速

6. 実行施策② 一次世代選手の育成

- 従来、オリンピックを目指す選手の育成環境の違いにより、強化期間中に立ち戻る場面が散見。
- 五輪初出場年齢の早期化と、強化期間の有効性向上を図るべく、HOPE育成カテゴリを新設し、オリンピックになるためのベース作りを実施する。
- HOPE育成は、ユースワールドでのメダル獲得を主な目標とし、五輪代表選手のパートナーを務められる技量まで引き上げる。



【オリンピックになるためのベース作り】

- ・ 意識づけ（含むインテグリティ）
- ・ 基礎知識習得
- ・ コンディション/ストレングス 等

6. 実行施策③

ーインテグリティ・レベルの向上

課題

「普及につながる強化」の実現のためには、強化選手が憧れの存在になる必要がある。

方策

- ・ SNS、メディア露出等、発信機会を増やす。
(適切な発信方法の具体化等については、本計画外だが必須課題)
- ・ 将来を担うジュニアとの交流機会を増やす

期待
効果

「人間力」の向上

- ・ 多様な人/組織の関与の認識
- ・ 当たり前前に感謝する意識
- ・ 応援者のリアルな存在の認知
- ・ 応援されることの価値の認識

**裏切らない気持ち
支え合う価値**

6. 実行施策④ –メンタルトレーニング

- 東京五輪前のコロナ禍において、史上最大級の逆境下、選手のメンタル維持という大きな課題に直面したが、対処方法に課題が残った。
- 五輪という大舞台におけるメンタル維持は、コロナ如何に関わらず大きな課題であり、
- 今後に向けては、選手－トレーナー間の個人的相性に依存しない方法を模索することが、ひとつの解と考え、取り組む。（メンタルトレーナーに依存する方法は、選手との相性問題が高い確率で発生し、成功しにくい）



定常 トレーニング

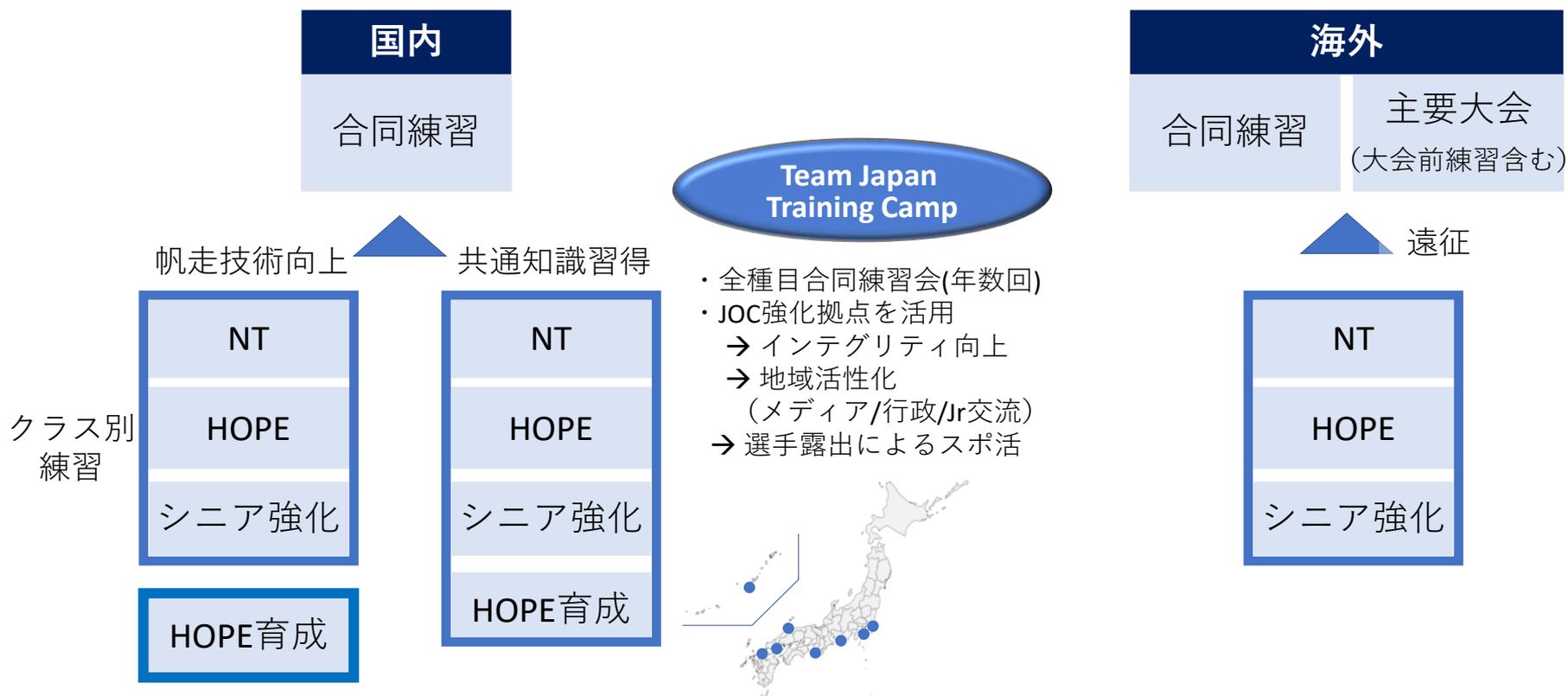
定期的に行う国内合同合宿などの共通メニューとして「メンタルトレーニング」を組み込み、長期視点で質的改善を図る。

独りにしない しくみ

他種目選手、地域応援者の存在を増やし、「支え合うしくみ」を構築。意識の底に存在する不安をなくす。

6. 実行施策⑤ - 育成・強化の基本活動

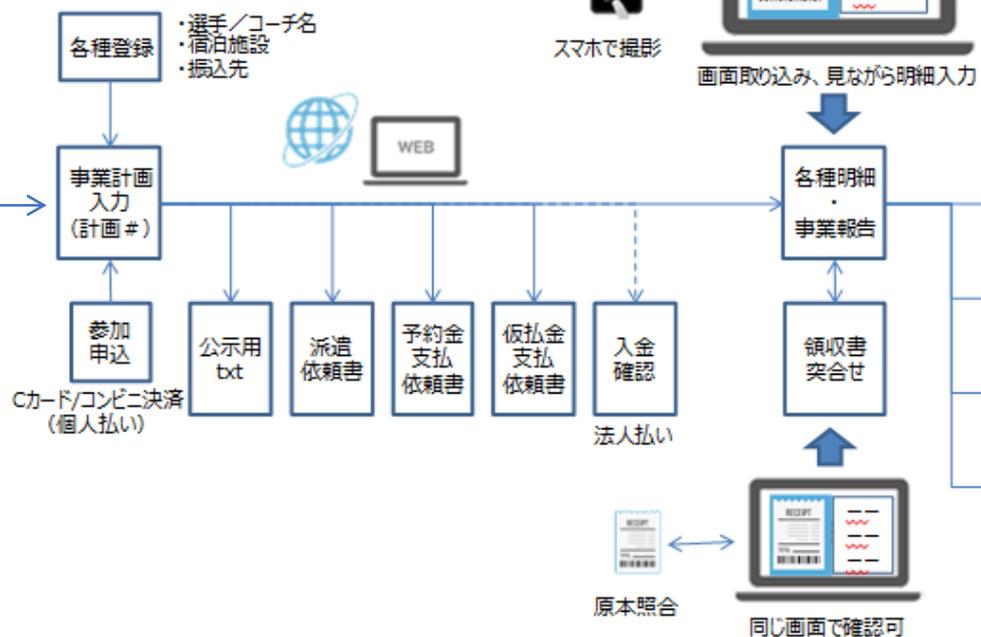
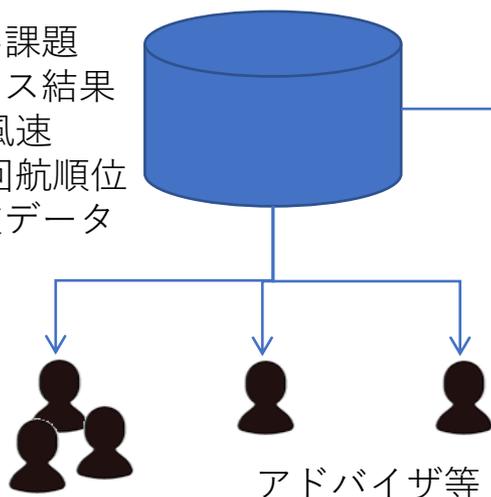
- 国内において、帆走技術と共に、インテグリティレベルを向上させる場、さらに、強化を普及につなげる場として、全種目合同練習会を、全国JOC強化拠点を活用し、年数回開催する。



6. 実行施策⑥ ー進捗の見える化

- 選手の課題と解決・進捗状況を見える化できるしくみを構築する。
 - 選手課題とそのエビデンス、大会での戦績と各種記録をタンキングできるしくみ
 - 活用のための人材登用も行う
 - 各事業の収支管理に必要な情報収集機能も保有

- ・ 選手課題
- ・ レース結果
 - 風速
 - 回航順位
- ・ 各種データ



目的：入力モレ、ミス抑制

目的：確認工数削減

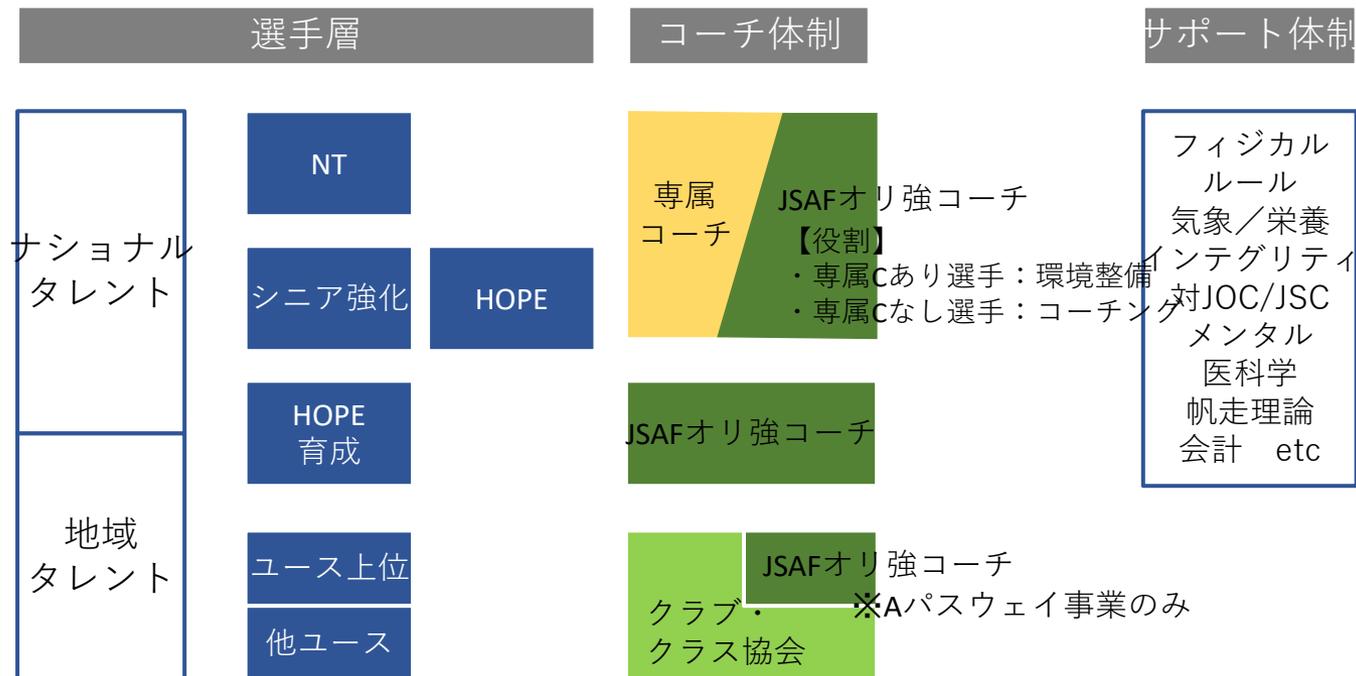
7. 選手層とコーチ・サポート体制

- 企業専属等のコーチや、地域クラブ、クラス協会との役割・分担を明確にすることで、Conflictなく、それぞれの力を発揮できる体制とする。

JSAFオリ強
の役割

- ① 対シニア層：環境整備（専属コーチなき選手に対しては、コーチング）
- ② 有望ユース層（HOPE育成）：次々回五輪候補選手の育成機能として、オリ強が主に関与

- 若年コーチを加え、コーチ新陳代謝と、引退選手のパスウェイのしくみを構築



A photograph of a person on a boat, wearing a dark jacket, operating a winch. The winch is a metal device with a central drum and a handle, used for pulling in ropes. A thick, white rope with blue markings is being pulled through the winch. The background shows the blue sea and a white boat structure. The text "キールボート強化" is overlaid in the center of the image.

キールボート強化

1. 世界のキールボートシーン近況

2028ロス五輪でキールボートによるチームレースを種目として採用する可能性がある。

2024パリ五輪から外れたオフショア・ダブルスについて、World SailingはWS主催の世界選手権を毎年開催することで、将来の復活を狙っている。

➡チームレースとオフショアレースの二本立ての選手強化

2. チームレースの選手強化実績

1. 海外キールボートレガッタへのJSAF代表チームの派遣

- ▶ 有望なユース選手や国内トップレベルの選手を派遣してきた
- ▶ 2022年のNYYCグローバルチームレースレガッタに代表チームを派遣予定

2. ユース選手向けのマッチレース強化合宿

- ▶ 毎年開催することで、選手強化プログラムのノウハウを蓄積してきた

3. キールボート・チームレース講習会

- ▶ 2018年以降、定期的に神奈川県小網代湾沖でクニリックを開催（合計10回以上）
- ▶ マッチレースやディンギーでのチームレースとは戦術が異なる部分がある
- ▶ オンザウォータージャッジを導入したチームレースとアンパイア・ブリーフィングを繰り返し実施

4. 大学対抗&U25マッチレースの開催及びレース運営の支援

- ▶ ディンギー経験者が学生競技終了後、シームレスにキールボート競技を体験
- ▶ 初開催から10年が経ち、本大会出身者がキールボート競技の中核になりつつある

3. チームレースの選手強化計画

強化プラン

- キールボート・チームレースの選手強化プログラムを継続
- 強化選手を中心とする競争を勝ち抜いた代表チームの海外チームレースへの派遣

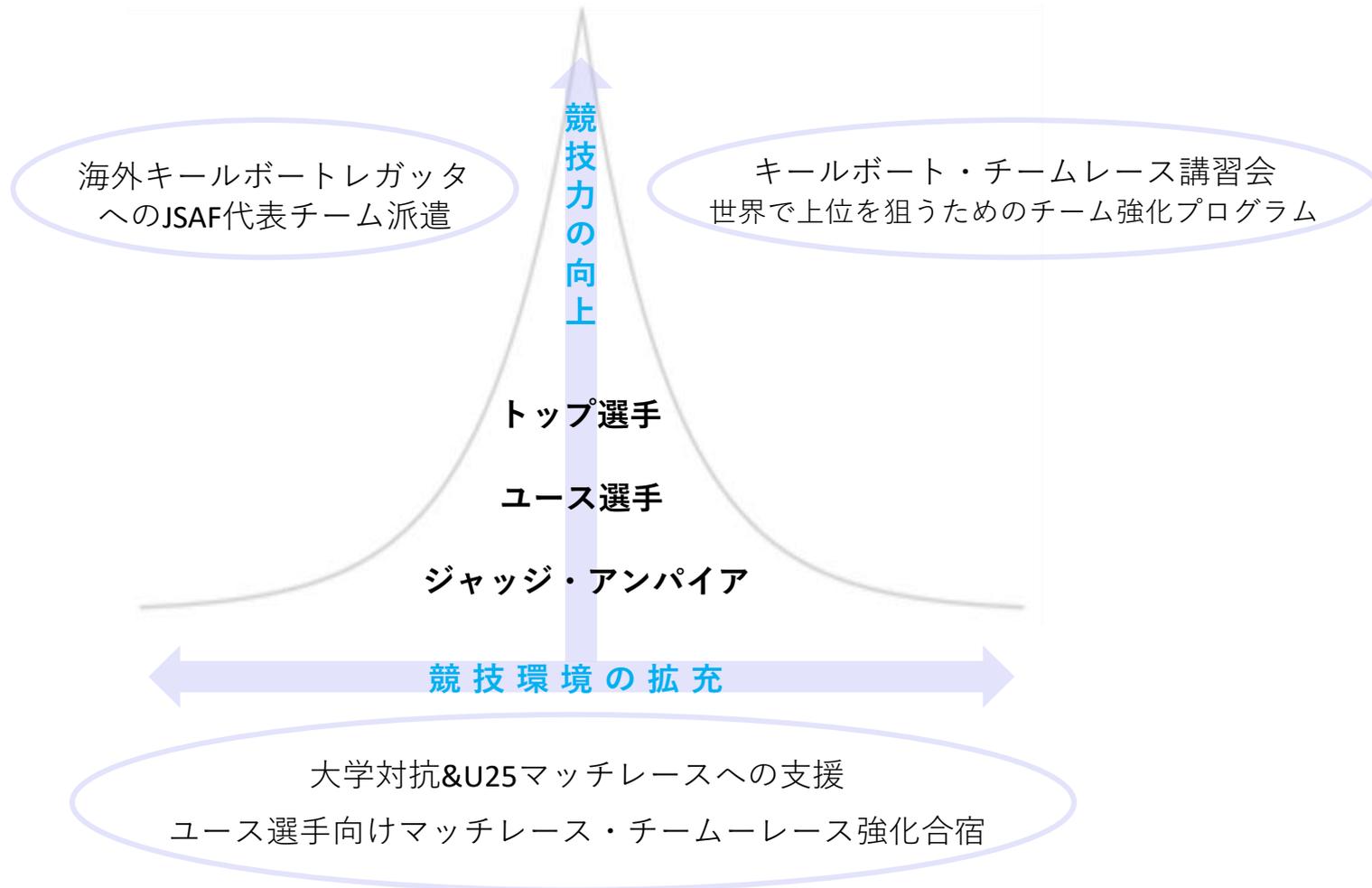
課題

- コーチの選任
- 強化スキルの取得（コーチの海外有望チーム等へ派遣など）
- クリニック実施の経費（参加費、強化費、協賛・・・）
- クリニックの内容
- オリンピック強化委員会にキールボート担当コーチを配置

タイムライン（2028ロス五輪の動向を見ながら進める）

- 年数回のクリニックとナショナルチームの選考
- 国内大会の開催
- 海外レースへの遠征（派遣）
- 2027代表選考（チーム選考か、個人選考か）

4. キールボート強化の戦略図



5. オフショアレースの近年の事績

本格的オフショアレースの日本開催

- ▶ 沖縄・東海レース、小笠原レース、パラオレースなど

海外オフショアレースでの日本人や日本艇の完走や優勝

- ▶ ヴァンデ・グローブ（白石康次郎選手）
- ▶ トランスパック（テンクォーター）、トランザット（鈴木晶友選手）
- ▶ ファストネットレース（北田浩選手）、シドニーホバートレースなど

※参加選手や参加艇の独自の努力と資金で出場

World Sailing Offshore World

- ▶ 日本代表派遣を進めるが、2020年中止、2021年は代表は選出したがコロナ禍で派遣断念

サバイバルトレーニング

- ▶ 必要に応じて海外から講師を招聘
- ▶ 海外各国連盟の講習扱いで海外各国連盟名の認定証を授与

6. オフショアレースの選手強化戦略

日本での本格的オフショアレースの振興

- レース開催支援（安全、通信、レースマネジメント、オフショアルールも含む）
- 艇、セーラーの参加促進
- 海外艇が自ら出場を希望するレースの開催（例えば沖縄・東海レースのような）

海外の本格的オフショアレースへの派遣支援

- 基本的なトレーニング支援
- 参加資格取得への支援

独自のサバイバルトレーニング・医療トレーニングの実施

- World Sailing 「Offshore Special Regulations」に基づく
- 日本人講師による日本語での実施。JSAF名認定証を授与